

## ▶ ペンで闘うテル

中国大陸への侵略だけでなく、日本は新たな戦端を開きました。1941年12月8日、ハワイの真珠湾を攻撃し、アメリカ、イギリス、オランダとも戦います。中国にいたテルは当時29歳、果敢にペンで闘っていました。6月には石川達三の小説『生きている兵隊』のエスペラント訳を完成させました。

『生きている兵隊』は1938(昭和13)年3月号の『中央公論』に発表されました。その前年の1937年7月7日の夜から8日朝、北京郊外の盧溝橋で日中両軍は衝突しました。いわゆる盧溝橋事件です。この事件を発端に、日本軍は北京・天津一帯を総攻撃し、8月には第二次上海事変が勃発、全面戦争へと拡大しました。

日本政府は当初、不拡大方針をとっていましたが、軍部に引きずられていったのです。言論統制は進み、作家たちは戦時協力に追随して現地に行き、戦意を高める従軍記を発表しました。盧溝橋事件が起こる2年前、第1回の芥川賞を受賞した気鋭の作家、石川達三も中央公論から派遣された特派員として従軍しました。しかし石川が他の作家と違うところは、赤裸々に日本軍人の悪辣非道な実態をこの小説で明らかにしたことです。

そのため、発表されるやいなや、内務省の通達により発売禁止、書店に並ぶ時間もなく、一般の人たちの目にふれることなく消えてしまい、戦前では幻の名作としてその存在が噂される作品だったのです。

## ▶ 周恩来も称賛したテルの活動

その頃、重慶にいた周恩来もテルの活動に目を見張りました。1941年7月27日、重慶の文化人たちが集まる席で周恩来はテルに対し、「日本

の帝国主義者はあなたを売国奴のアナウンサーと言っていますが、あなたは日本人民の忠実な娘であり、真の愛国者です」と褒めたたえました。

10月には、テルと劉仁夫妻に初めての子ども、長男が生まれました。名前は、希望の星と願って劉星と名付けました。また、テルの散文集『嵐の中のささやき』も中国報道編集部より出版されました。上海以後からの回想記です。

11月16日の郭沫若生誕50周年を記念した際には、テルは重慶から発行していた『新華日報』に「暴風雨時代の詩人」を撰してお祝いしました。郭沫若はいたく感激し、テルが持っていた赤いハンカチに墨色で詩を書き、テルに贈っています。

はてしない四方は暗闇が広がり、  
天空には群星が輝いている。

その輝きは雪を照らすには遠すぎ、  
書を照らすにはそばの燈がありがたい。

(澤田和子「長谷川テルの足跡」『長谷川テル一日中戦争下で反戦放送をした日本女性一』「長谷川テル」編集委員会編・所収)

## ▶ 日本の敗北

1942年、テルの母よねが東京で亡くなりましたが、テルはもちろん知ることはありませんでした。闘うテルは全世界の反ファシスト統一戦線を結成すべく、タイプライターを叩き続けて、「全世界

の反ファシスト統一戦線の兄弟たちよ、われらの共同の敵を打倒しよう!」「現今の日本婦人の生活」「黎明の合唱」「国際青年祭のための題詞」などの原稿を『中国報道』や『新華日報』に発表しました。

そして1945年5月には、『戦う中国で』が重慶世界語通信教育社から出版されました。そこでは、劉仁の後を追って、上海、広州、漢口(現在の武漢)まで抗日戦線に従事した日々を綴っています。

第十回 エスペランティスト長谷川テルの人生③  
「混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義」「私は人類の一員だ!」

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおい よしひろ)

8月15日、ついに日本は中国に敗北し、米英にも敗北しました。テルは「反攻」の編集室でそれを知りました。雑誌「反攻」は、1938年漢口で創刊され、月二回発行されていました。主な内容は、抗日運動の呼びかけ、東北抗日義勇軍などの抗日闘争の実情を紹介するものでした。また編集委員には東北で著名な蕭軍など何十人ものものが招聘され、若者たちに大きな影響力を持っていました。そして当時の「反攻」の編集部と印刷所は重慶にありました。

重慶の街は勝利の喜びに沸き立っています。勝利を祝うたいまつ行列の中にいるテルの心はしかし、中国の人々とは違ってやはり複雑でした。

日本敗北後の9月11日テルは、「岐路に立つ日本」と題し、「祖国を離れて、すでに8年。祖国への思いは日本が以後、再び爆発しそうな火山になることなく、明るい颯爽たる島国であることを望む」という日本の未来への期待を込めた文章を書きました。

テルの心の中には、愛する肉親や友人たちがいる日本への望郷の念があったことでしょう。一度帰国したい、という思いもあったことでしょう。しかし、中国では勝利の酔いも冷めやらぬ中、中国共産党と国民党との内戦が勃発したのです。

### ➤ 劉仁の故郷へ出発

1945年9月18日、テルと劉仁は、国民党の指示により、反内戦工作に従事するために、東北（旧満洲）へ旅立つことが決まりました。11月、劉仁はテルと長男の劉星を連れ、まず漢口に移動しました。その時、テルのお腹には赤ん坊がいました。

しかし厳しい中国の状況は続き、1946年1月、東北への旅の途中、長男の劉星が国民党特務によって誘拐されました。しかし1月10日、共産党と国民党の停戦協定が成立し、劉星は夕刻、二人のところに帰ってきました。そして南京経由の船で上海に到着しました。

2月上旬、テルと劉仁は、上海より海路、北上

して中旬には劉仁の故郷に近い瀋陽に着くことができました。この瀋陽で4月、二人目の子ども、劉曉嵐（後の長谷川暁子）が生まれました。この時、劉仁の弟の劉介庸が、故郷から兄である劉仁の妻を連れてきたのです。

劉仁はかつて“結婚”していたのです。その事情について、テルには一切、説明がなかったようです。妻は楊春輝と言いました。この結婚については、中国封建制下の結婚のありようについて言及しなければいけません。

当時の中国では、両性の意思など関係なしに、親同士が一方的に結婚を決めてしまうのです。生まれてきた女の子は纏足をしました。5歳か6歳頃から足の指を裏側に折り曲げ、布できつく巻き上げるのです。自然な足の成長を止めさせ、足を小さいままにさせておくのです。私もかつて纏足をしていた女性が、お婆さんになってもよちよち歩きをしているのを見かけたことがあります。そして親がまだ小さい男の子を、家との関係でそんな娘を選ぶのです。

魯迅、郭沫若などの文化人たちなどもそのような結婚を強いられ、最初の妻とは早々に別れています。毛沢東、劉少奇、朱徳、賀竜などの革命家の第一世代なども、ほとんど最初の結婚はそのようなものでした。革命が成功し、新中国になった時、多くの革命家は新たに若い女性と結婚しました。

しかしこれは止むを得ない事情だったと解釈するのが人間的な感情だと思います。革命家の中では、周恩来だけが鄧穎超と若い時に恋愛し結婚し、終生ともに過ごしました。革命後、若くて綺麗な女性と新たに結婚しなかった男として周恩来が人気ある要因の一つとっていいでしょう。

劉仁も12歳の時、両親が一方的に決めた女性、7歳年上の楊春輝と結婚させられたのでした。この事実をもって劉仁は重婚していたとか、テルに嘘をついていたと一部の日本では言われたこともあったようです。しかし、これは中国の事情を知らない故と言えるのではないのでしょうか。（続く）